
六月の雨

六畳半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六月の雨

【著者名】

NZマーク

【作者名】

六畠半

【あらすじ】

ある六月の曇下がり、男は少女と出会ひ。

(前書き)

この作品は前作五月の空とは人物、舞台共に異なる作品です。それを確認したうえでご一読願います。

耳朶に触れるのはアスファルトを叩く小止みない雨の音。見上げた視界に入るのはどこまでも広がる灰色の雲。肌を撫でるのは湿りきつた重たい風。

世界の全てが陰鬱に彩られる六月の雨の中、男は寂れた駅のホームに一人佇んでいた。

南北に伸びる単線に沿つて建つ細長いその駅は、南端に木造の駅舎がある。それは中央に通路をくり抜いたようなアーチ型をしていて、通路の北側出入口の脇には自動改札機が一台置いてあつた。そこから北に向かつて弧を描くようにホームが伸びている。

ホームには中央付近までビニール布の簡単な屋根があつて、それを支える鉄パイプに吊り下がつた電光掲示板が、同じような内容の注意書きや広告を延々と表示し続けていた。

その屋根の下。ホームに等間隔で並べられた青色のベンチに男は座っている。

縦に薄くストライプの入つた紺色の背広に青いネクタイ。足元には真新しい黒地の鞄。東洋系の顔立ちに、片まで伸びる茶色の髪。左右の耳には計五つのピアスがぶら下がつていて。善くも悪くも若気の抜けない新社会人としては妥当の外見で、男はベンチに腰掛けっていた。

前を向いた視線は、どこでもなく中空ちゅうくうをとらえ、その表情にはいささか霸氣がない。腿に両肘をついた前かがみの姿勢が殊更倦怠感じょじやうけんたいかんを感じさせた。

男はふと、右腕に付けた銀の腕時計を見た。秒針が時を刻むアナログ時計は今が14時23分であることを示し、小さな一つの液晶にはそれぞれ西暦が20XXXX年、曜日が土曜日と表示されている。

男はため息を付いた。腿から手を離し足を組む。胸から煙草たばことライターを取り出して、煙草を口にくわえて火を点けた。

登り上がる紫煙は、湿った大気にゆっくりと霧散していく。その向こうには、降り止まない雨と隙の無い雲があった。灰色に濁る六月の暁下がりは、いつになく孤独感に満ちている。

やがて男は、短くなつた煙草の吸い殻をつまんで立ち上がつた。ホームを横切つて端まで歩き、煙草を地面にこすりつけてから線路へと放つた。

雨の中へ投げ出された煙草の末路を見送る事なく男は振り返つた。振り返つて、そこにあるものを見て、大きく目を瞠つた。

視線の先には少女がいた。

閉じた両足の上に手の平を重ねて、ベンチに限りなくしとやかに座つている。棒のように細い四肢は混じり気のない純白で、誰が見ても女学生を連想する服を着ていた。髪は左右二つに分けられて、それぞれが三つ編みに編まれている。

男は、突然現れた少女に面食らつて、その場に立ち尽くしていた。「これ、貴方のですよね」

不意に、少女が口を開いた。小さくてか細い、それなのによく通る声だった。

「……あ？」

男は意味もわからず呟いた。すると、少女は足元に置かれた黒地の鞄に手を伸ばす。
「あ、ああ……、邪魔だつたか、悪い」

男は少し狼狽していて、その声は微かに震えていた。すぐに駆け寄つて鞄を受け取る。

「何故貴方が謝るのですか？私が勝手に此處に座つていたのに」少女が顔を上げて言つた。男は自分がたじろいでいると少女に気取られたような気がして焦つた。

「……お前こそ、わかってるのに座つたのかよ」

男はわざと高圧的に言つた。しかし少女は動じず平然と構えてい

る。

「ええ、貴方に気付いて欲しくて」

「気付いて欲しい……？そいつは」挨拶だな。つうかお前誰だよ」

男は言いながら少女の隣に座った。

「驚かせたのは申し訳ありません。非礼はお詫びします」

「別に驚いてねえし。それより名前。お前誰？」

少女は少し躊躇つように俯いてから、『氣まずそう』に答乗った。

「……よひら、雨宮四片と言います」

「珍しい名前だな……まあいいや、用件は何だよ。どうせあと一時間は電車来ねえから、暇つぶしからにはなるしな」

「ありがとうございます。それでは始めさせて頂きますね」

やけに通る四片の声に、周囲の空気が変わった気がした。男は驚いて四片の方を見向く。そこには自分を見詰める少女の顔があつた。人形のような、古典的な可愛さを持つその容貌が今は悲しみに歪んでいる。

「……」

男は一の句が継げなかつた。その悲哀に満ちた眼差しに心奪われ、誑惑に落ちたかのような深い後悔に襲われた。

そんな男を尻目に、少女は自分の右腕を男の額にかざす。そして手の平を広げた。

「な……ッ！」

体に異変を感じた時にはもう遅かつた。

「思い出して……トヤ……！」

やけに通る少女の声と共に、男の意識は吹き飛んだ。

* * *

何かに引っ張られるような感覚があった。少しづつ力が増して、その先に光が見えた。

「……ツ！」

男は驚起するように目覚めた。

最初は思考が鈍つて状況が理解できなかつた。ぼやけた視界が徐々に鮮明になると、男は眼の前に広がる光景の違和感に気付いた。

「何だよ、これ……」

意識を失う前と同じ駅のホームが妙に明るい。空を覆い隠していた雲は綺麗に無くなり、そこには一面の青空が広がつてゐる。

男は不安になつて立ち上がつた。忙しく辺りを見回す。さつきまで真横にいた少女はどこにもおらず、自分を雨から守つていた薄汚いホームの屋根は心なしか綺麗になつてゐる。そこから吊り下がつていた電光掲示板はすっかり無くなつていて、ホームの出入口に一台あるはずの自動改札機も見当たらない。

「一体どうなつてるんだよ……」

男は咳きながら出入口に向かつて歩き始めた。車掌が立つタイプのカウンターのような改札を抜け、通路を通り、駅の南側に出た。梅雨とは思えない強い日差しが降り注いで、男は思わず手で口よけを作つた。

駅前の道路は道幅が狭く、いかにも抜け道といつた感じの狭隘で閑疎なものだつた。木造の民家が立ち並ぶ住宅地を東西に伸び、電車の往来がほとんどない静かな線路と交差している。横断歩道の脇には駅舎よりも高い桜の木があつて、青々とした陽葉をその枝に茂らせていた。

「間違いない……。さつきまで俺がいた場所だ、でも……」

何が起こつたと言つのだらう。雨宮が自分を卒倒させてかなりの時間がたつていたとしても、駅に取り残されていたら誰かが気付くはずだ。それに、この天候の変わりようは一日一日じやあり得ない。そして、雨宮が最後に言い残した不可解な言葉。思い出す？ 一体何を。大体奴と自分にどんな関係があるつて言つんだ。

男は、桜の木の下陰に入つて思案顔を浮かべながら、終始そんなことを考えていた。

何分経つただろうか、男が何度目かの溜息をついたときだった。左の方から和気藹々《わきあいあい》とした会話が聞こえて、男は何気なく見向いた。学生とおぼしき一人がこちらに向かってくる。片方は背の高い男子で、片方は頬りなさそうな小さい女子だつた。耳をそば立てた訳ではないけれど、いくらか会話の内容が聞き取れた。

「どうだつた修治。テストの出来は」

「聞かなくたつて分かるだろ、散々だよ」

「いや、そういう意味じゃなくて、前よりは上がった?」

「ああ、お陰様で。四片に教えてもらつた甲斐はあつたわ、これで補修はなくなつたし、夏休みはいろいろと遊べそうだよ」

その声で、男の表情は凍りついた。木の幹から身を乗り出して、必死に女子を見よつとする。

「雨宮……ッ」

見間違ははずの無い華奢な体、三つ編みの髪、色白の肌。その視線はまつすぐ隣の男子を見つめ、表情は喜悦にほころんでいる。男は今すぐでも駆け寄つて食つて掛かろうかと思つたが、流石にそれは憚られた。どうしようかと決めあぐねている矢先に、電車の到来を告げるかまびすしい遮断機の音が男の耳を襲つた。驚いて線路の先を見ると南の方から遠由に減速しながら向かつてくる電車が見えた。

「まだ電車は来ない筈……」

そう呴いて、男は腕時計を見ようと視線をさげた。すると、地面を捉えた視界に小振りのサツカーボールが横切る。それは、速度を緩めながらも遮断機の下を通り抜けて横断歩道の中に入った。そしてそれを追い駆けるように一人の少年が横断歩道に向かつて突っ込んでくる。自分の背より少し低い遮断棒を握り潜ろうと腰をかがめた。

迫り来る鉄の大質量体の進む先に、少年が入った。

「危ない！！」

そう三人が叫んだのはほぼ同時だった。三人とも反射的に体が動く。一番早かつたのは雨宮で、軽々しい身のこなしで遮断棒を飛び越え、わき目もふらずに、ボールを追い駆ける少年を抱き上げた。それを見た電車の運転士がようやく全体重をかけてブレーキを押し込んだ。車輪が金切り声を上げる。列車の速度は約40キロ、雨宮との距離はもう数メートルしかなかつた。

「待て四片！」

青年が叫んだ。その顔がこれから起じると容易に想像できる最悪の結果に恐怖していた。

どんづ

鈍い打撃音と共に列車は横断歩道を駆け抜ける。雨宮が咄嗟に放り出していたのか、少年の小さい体が宙を飛んで背中から落ちた。しかし当の雨宮はどこにもいない。急ブレーキをかけた列車は、ホームに入りきらず停車位置の数メートル手前で停まつた。

一瞬の出来事だつた。あまりに一瞬だつたから、反動で場は不気味に静まり返つてしまつた。

その緊張のような静寂が瓦解するように、少年の泣き声が響いた。

「おい、お前！」

男は、目の前で転がつて嗚咽おえつしている少年に怒鳴つた。すぐに駆け寄つて、顔を持ち上げる。状況が理解できずに泣きじゃくり、鼻水と涙でくしゃくしゃに潰れたその顔に男は見覚えがあつた。

「お前……何で……」

何度か開いたことのある幼稚園の卒業アルバム。そこで、無邪気な笑顔を浮かべている幼かつた頃の自分の顔。その顔が、今ここで泣いている。男は気味が悪くなつて少年から素早く手を離した。

「まさか……そんな……」

男はもう分かり始めていた。この一連の不可解な現象の真実を、その原理を説明することは到底かなわないけれど、雨宮が誰で、この少年は誰で、この事故は何で、そして今がいつなのかを。

「嘘だろ、辞めてくれ……。くそつ、ちくしょう！ 雨宮アー！」

行き場を失った不安と驚きが爆発して、男はただ吠えた。走り出して、横断歩道を飛び越えて、雨宮のいるであろう場所に遮^{しゃ}二無^{むい}二駆けた。車輪に巻き込まれたのだろうか、雨宮は電車に踏み潰され、かるうじて二つの車輪の前で横たわっていた。その体は人の形を成していないくて、唯一外に投げ出されるように残つた美しい相貌が鮮血にまみれ、瞼は虚ろに開いたままだった。

先に駆け寄っていた青年が雨宮に向かつて何やら叫んでいた。その目からとめどなく涙が溢れていた。電車から運転士が降りてきて、その凄惨な死に様を目の当たりにして呆然と立ち竦^{そよ}んでいた。若い運転士だった。

どこかで庭いじりをしていた老夫婦。近くで遊んでいた子供達。いじばた井戸端会議に興じていた母親達。それらが何事かと野次馬のように近寄つてくる。しかし、騒然とする現場を意に介さず男は叫び続けた。今起こっている状況を否定する何かが欲しかった。

「てめえ、何しに来た！ 今更俺に何しに来たんだ！」

雨宮を振り起こそうと伸ばした手も、もう何も掴むことは無かつた。まるで幽霊になつたかのように、男の存在が世界から切り離されていく。目の前がかすんで、周囲の音は遠くなる。遂に視界は暗転した。それでも男は叫び続けた。

男は、五歳のときに鉄道事故を起こしていた。

その事故は、ボールを拾うために横断歩道に入った幼稚園児を、女学生が制止して電車に跳ねられるという、反吐が出るほど下らない原因の元に起こった。それでも、半日以上の鉄道遅延を生じさせ、一人の尊い命を奪つた悲惨な事故は、偏境なこの街を震驚^{しんがい}させるに

は十分だつた。

被害者と鉄道会社は、少年の両親を相手取つて訴訟を起こした。たかが一時間に一本しか電車の走らないような地方支線だというのに、人身事故に付け込んで多額の賠償金を請求し、被害者の方も数千単位の慰謝料を求めた。

圧倒的に不利だつた加害者側は、やむなく支払いを命じられた。といつても、田舎の商店街の酒屋で細々と食い繫いでいるような低賃金労働者にそんな額の金が用意できるはずも無い。処理能力の限界を超えた両親は二人の姉弟を自動養護施設に預け、離婚した。

それからと言うものの男は、歳が重なるに連れてその事故の明確な詳細を記憶の中で再認する度に、心に深い傷を負つていつた。悪いのは自分で、その所為で女学生は死んで、両親は離婚した。^{はんすう} 反芻すればするほど自分の犯した罪の重さに耐え切れずひきこもるようになつた。

小学校高学年頃には、学校に行かなくなり、中学に入学してもうにか復学しても、今度は学校の不良グループとつるむ様になつて悪事に走つた。誰かを傷めつけていたりだけは、過去を忘れられた。自分が今まで背負つてきた以上の苦しみを誰かに与えることで、自分が社会的に特殊な過去を持つ者じゃないような気がした。

その間に成績も評判も際限無く落ち続け、殆どお情けで入れてもらつたような高校を出たあとは定職にもつかず、気に入つたバイトを数ヶ月やってある程度金がたまれば、また自堕落な生活に戻る。そんな浮浪者のような事を繰り返していた。

今日は、唯一自分を見限らずに面倒を見続けてくれた姉に紹介されて、受けるだけでいいからと、下町部品工場の面接試験のためにこの場所を訪れていた。

雨は上がり、陽は沈もうとしている。空にあつた雲は千切れてしまになり、雲間から夕日が覗いている。

男は元の世界に戻っていた。白茶けたプラスチックベンチの前で

立ち尽くし、握った拳に力を込めて、溢れんとする涙を必死に堪えている。

男は“思い出していた”。

今生きる自分が、一つの命を犠牲にしているということを。

そして、理解し始めた。

自分が生きるための目的と、その訳を。

「……」

もはや男は力無くその場に佇立^{ちよりつ}している。心の動搖はすでに自制^{じせい}が聞かなくなつていて、鼻水まじりの涙が顔面を覆つっていた。

鉄パイプに吊り下がつた電光掲示板が、電車の到着を告げていた。先ほど雨宮によつて引き出された鮮明な記憶と同じ、銀色の車体に桃色の横線が入つた二両編成の電車。ただ違うのは、それが十余年の時間経過を体現するかのように、少し古びて霞んでいることだけだった。

ホームに滑り込む電車を尻目に男は天を仰いだ。そして息を深く吸い込み、夕空に向かつて猛々《たけだけ》しく吠えた。

* * *

夜の静寂^{じじま}に、満月が輝いている。

南北に長い寂れた駅の南端に、線路を横切る小さな横断歩道がある。歩行者しか通ることのないその道の両端には、古びた遮断機が置かれていて、降りる気配の無い縞模様の遮断棒を果てしない星空へ向けていた。

その遮断機の脇、月光に照らされて黒光りする古木の根本。静かに置かれた青白い五つのピアスの横で、小さな純白の紫陽花が一つ、麗しく咲いていた。

花弁に付けたその雲を、微笑みの様に燐然と輝かせながら……。

(Fin.)

(後書き)

先ず最初に、こんな拙作を「」読了いただき本当にありがとうございました。

自分は雨が好きなほうです。曖昧な表現ですが、好き、と断言してしまっていくらか語弊がありそうなので、そういうことにしておきます。

昔は、雨を忌み嫌っていました。色々じとつくし、徒步で学校に通っていたからといふこともあります。何より心が晴れませんよね、雨の日は。

でも最近は、きっと大人に近づくと誰もが感じるのかもしされませんが、心が落ち着く安息日のように感じるのはないかなと思します。

さて、本作には雨宮四片あまみや よひらといつ、清廉潔白、文武両道、容姿端麗、温厚篤実の超人少女が登場します。まあ実際は短編なのでその超人ぶりの片鱗を仄めかせる程度に収まっているのですが、設定上は憎たらしいほど良く出来た人、になっています。あと、久しぶりに名前がフルネームまで付いたキャラで、そういう意味で言うと自分の中では稀有な存在だつたりもします。

人物の名前を決めるのは、なろうに投稿する前、自己満足程度で作品を書いていた頃から苦手です。結局今回も変な名前になっちゃった訳ですが、一応この四片といふ名前は、雨季に咲く花の代表格、紫陽花の別名から拝借した物で、それなりに意味が在ります。

そういう設定を知った上で読んでみると、また違った味があるかもしれません。
そんだけです。

いやー、あとがきつて難しいんですね、なんか脈絡の無い冗長な文章になってしまいました。本文共に読みずらくてすいません。

最後に、次回作を書くかどうかもわかつていませんが、またお目に掛かる機会があればそのときは暖かい目と寛大な心で見守ってくれると嬉しいです。また、批判でも結構ですので、何か感じたこと、誤字脱字の報告も五月の空同様募集してます。お気軽にどうぞ。

それでは。

(更新履歴)

- 3 / 9 本作投稿。誤字脱字をちまちま修正。
- 3 / 10 送り仮名追加。本文後半とあとがきを大幅改稿。他にもいくつか改稿。
- 3 / 11 句読点などの細かな修正。
- 3 / 12 主に二点リーダの修正。おおむね完成。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8232d/>

六月の雨

2010年10月8日15時52分発行